高退協ニュース

No. 184
２０１３年
９月３日
発行
高知高退協
事務局

〒780-0850
高知県高等学校退職教職員協議会
高知市丸ノ内2丁目1～10
高知城ホール高教組気付
連絡先　TEL 088～822～6822
郵便振替口座〇一六五〇～二～一一八九三

憲法蹂躙！戦後最大の危機

高退協
憲法学習会

この国の危うさに身震いする嫌悪感

柳井卓

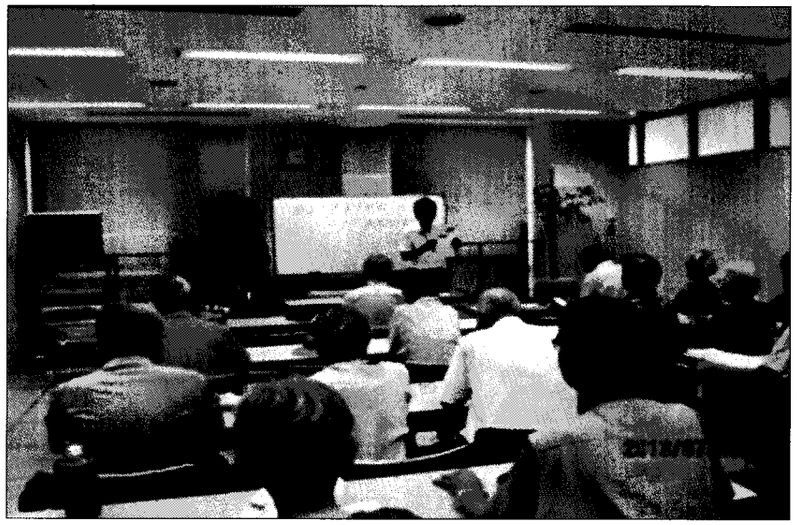
「憲法学習会」から日が経つにしたがって、まるで日替わり定食のように次々に報道される憲法がらみの事案に恐怖を覚えます。あからさまに、傍若無人に振る舞う国家権力の言動にこの国の危うさを、身震いするほどの嫌悪を感じないではいられません。

原稿依頼のあった「学習会の感想」では収まらない思いを書かせて頂きます。

去る、広島、長崎の『原爆の日』の「平和祈念式典」に出席した米オリバー・ストーン映画監督の言葉に、日米安保、集団的自衛権、秘密保全法案、NPT（核拡散防止条約）、武器三原則の見直し等々の憲法問題が、なかんづく「９条関連」が集約されていると思いました。その他、原発再稼働、TPP参加問題、沖縄地位協定等々、嫌でも毎日目に飛び込んでくる国民にとって重大かつ深刻な問題に、いったいこの国はどこの国だ！憲法はどうなっているんだ、と暗澹たる気持ちになります。

オリバー・ストーン監督の“日本が米国の属国化している”ことへの懸念と同情？の言葉には、別に新鮮な驚きは覚えませんでしたが、至言だと思います。沖縄の地位協定に反する数々の問題でも、例えば、オスプレーの協定違反の300件を超える飛行実態の調査記録に基づいた、沖縄県の抗議に対する防衛庁の回答などは、いったいこれはどこの国の機関かと怒りを通り越してただ呆れるばかりです。沖縄が戦後どれほどの差別と負担を強いられてきたか。沖縄県に足を踏み入れてきた歴代の首相、閣僚たちは、同じ日本人としての自覚や痛みを抱いたことがあるのだろうか。半世紀以上もの年月、戦後処理を放置してきた後ろめたさなど微塵も感じていないのではないかと疑います。歯の浮くようなきれいごとを口にして、日帰りで帰っていく政治家たちには、一国を担う“人間としての信頼”を持ちえません。

長崎の『原爆の日』の田上市長の「平和宣言」。“被爆国の原点に返れ”は、猛暑にたるんだ脳味噌をぐっと覚醒させました。戦後生まれであろうとなかろうと、国民すべてがそこにもう一度立ち返るべきだと強く思いました。首相の言葉。“非核三原則を堅持しつつ、核廃絶に向けて努力を惜しまぬことを誓う！”　誓うと言ったからには、この言葉を国会議事堂の正面に堂々と掲げてほしい。併せて、96条の改憲条項２分の１などは姑息で恥ずべき発想であることを、議員全てが日々この垂れ幕を眼にしっかり焼き付けてほしいと思います。



高退協 憲法学習会から

８・１５終戦の日を考えるつどい

従軍慰安婦 強制労働の真実

●●●集会に90名が参加●●●

国松　勝

アジア太平洋戦争が終結した８月15日、68回目の「終戦の日」を迎え、「戦争を語りつぐつどい」が高退協や県退協、退婦教、革新懇の共催で行われました。会場になった高知市の県立人権啓発センターには90名が参加しました。

日本の侵略戦争を認めず誤った歴史認識に固執する安倍政権の下で、新しい試みとして、歴史の真実を学ぼうと従軍慰安婦と高知県における朝鮮人強制労働問題の真実をテーマに討論が行われました。発言者は幡多高校生ゼミナール会長として1995年８月15日韓国ソウル市で開かれた解放50周年光復節記念式典に日本人として初めて招待され参加した中川有紀さん（36歳）、山下正寿・幡多高校生ゼミナール顧問、藤原義一・草の家学芸員。

終戦の日を考える集い

中川さんは、式典で朝鮮総督府解体に立ち会った様子や当時73歳の従軍慰安婦の証言を聞き大きな衝撃を受けたことを報告、報告を聞いた私たちもそのリアルな様子に強く心を打たれました。この体験を通じ韓国の人々に対し加害の歴史が重くのしかかったこと。「加害の歴史を知ることは勇気がいるが、目をそむけてはいけない」と話しました。

山下氏は、幡多高校生ゼミの活動や日韓高校生の交流を通じて学んだことや戦時中に死亡した朝鮮人労働者を慰霊する碑を津賀ダムに建立した活動を報告、藤原氏は中曽根康弘元首相がボルネオに海軍の慰安所を設置した証拠文書について説明しました。

またフロアーから高知県での朝鮮人の強制労働の実態が報告されました。

哀悼

小松　敏幸
７月25日逝去

謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

高教組　現状と課題

学びの夏？・・・細る引き出し

高教組委員長　竹島久美

この夏休み、高教組からも、名古屋の全国教研に七名（うちレポーター二名）をはじめ、全国あちらこちらに学習に出かけています。

私はというと、昨年は、神戸の全国教研二日と、京都の駿台予備校の教員向けの小論文の講座（進学協議会の教員派遣事業）一日の計二回県外に出ましたが、今年は、夏休みに学校に出ていかなくてはいけない日が去年に比べて多いのと、資料を読んで自分で考える時間も必要かなと思い、おとなしく県内にとどまっています。とどまってはいますが、補習、農業クラブ県大会二日・四国大会二日、顧問に入っている吹奏楽のコンクール二日、外部から講師をよんでの進学・就職対策面接講習会三日、進路の日直、職員会・校内研修・校内選考会など、丸一日自由になる日の方が圧倒的に少ない状態です。

私が教員になったころの夏休みといえば、今年は『土佐日記』を通して読んでみようとか、漱石・鴎外の作品を読み返してみようとか、もっとゆとりのある研修ができていたように思います。二学期の準備などしておかなくても、自分が若くて普段無理がきいたというのもありますが、今は目先のことや一学期にやり残したことに追われて、夏休みが終わってしまう感じです。これでは、授業の裾野というか、授業の流れや生徒の反応に応じて引き出せる引き出しといったものが細ってしまいそうで、不安になってしまいます。

今、学校では、学校経営構想図に基づいて分掌や教科の目標を決め、それらと合わせる形で個人の目標設定シートをつくって、それが昇給の査定へと結びついていきます。それらの整合性や目に見える成果・効率などが重んじられ、すきま・ゆとりといったものが入り込む余地がどんどん少なくなってきています。そのような中で、私たちが目指すところをどこに置き、どんな力を持つべきなのか、考えなくてはなりません。

今度は学びの秋。今年の高校・障害児学校教研（教育のつどい）は十一月十六日に講演・課題別分科会、二月二十二日に教科別分科会を行う予定です。講演は山下正寿さんにお願いしています。どうぞお越しください。また、採用をめざす学習会での面接官や書記局のパソコンの入れ替えなど、この夏も高退協の皆様にお世話になりました。この場をおかりしてお礼申し上げます。

高退協　夏季学習会で講演する　正岡　光雄さん

夏季学習会

「一生涯学んで―数学にかける情熱はどこから―」

土居　康男

「多くの盲人が音楽家として生きた時代の物語」

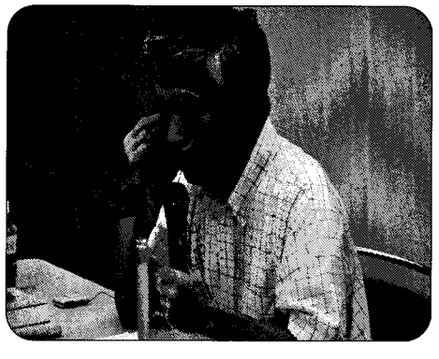
正岡　光雄

8月29日（木）に2013年度高退協夏季学習会が高知城ホール2階会議室で30名の参加で開かれました。

講座Ⅰは、「一生涯学んで―数学にかける情熱はどこから―」と題して、土居康男さんに語ってもらいました。退職後も専門教科の数学の研究と続けて、高教組の教育研究集会などでの問題提起やアドバイスなど活躍を続けています。学問研究にかけるエネルギーや大学院進学への熱意があつく語られました。ただ、短い時間で語る内容が多くて、時間不足となってしまいました。15～16枚も準備した資料のうち土居さんの真面目な性格と相まって、3分の1も進まずに残念でした。再度時間をとって聞きたいという声もありました。

講座Ⅱは、「多くの盲人が音楽家として生きた時代の物語」と題して正岡光雄さんに語ってもらいました。「こうたいきょう第32号」に執筆された同題名の研究を豊かに語ってもらいました。CDでスティビーワンダーから三味線の音までを流しながら、説明がありました。また、図書館から数巻も借りてきたビデオテープを流しながら興味をそそられる語りでした。正岡さんも真面目な性格から、前日には会場でビデオテープがきちんと視聴できるか、またどの部分を視てもらうかの頭出しも行うなど周到な準備をされていました。

講座の後は、26人の参加で懇親会を開きました。2時間の予定が大幅に時間延長して大いに盛り上がっていました。



夏季学習会
講師の土居　康男さん

こうたいきょう第３４号 投稿のお願い

毎年のご協力ありがとうございます。本年も従来通り原稿を募集しています。文芸・創作・紀行文・自由論文など何でも結構です。お一人が少なくとも一遍の応募をお願いします。

今回は、「憲法問題」を特集します。

○締め切り・・・・・１１月１０日（日）

高退協旅行ご案内

日　程　11月20・21日・・・1泊2日
コース　石見銀山と出雲大社・
　　古代出雲歴史博物館
予　算　約35000円
申込締切　9月　30日
連絡先　浜田りか（TEL088-883-0575）